

連載：「世界における非核・脱原発への挑戦⑰

戦時のモスクワからエマニュエル・トッド『西洋の敗北』 (大野舞訳. 文藝春秋社、2024 年)を読みつつ、……

市川 浩(広島大学名誉教授)

本誌は「非核の政府を求める京都の会」の発行。本来なら、筆者が研究者として専攻した旧ソ連、ロシアにおける軍民双方の核開発、戦火のもとにあるウクライナの原発について語らねばならないであろうが、それらは拙著『ソ連核開発全史』(ちくま新書、2022 年)や拙稿「戦争と原発—ウクライナ」(山崎正勝・舘野淳・鈴木達治郎編『証言と検証—福島事故後の原子力：あれから変わったもの、変わらなかったもの』あけび書房 2023 年、125-134 頁)に譲り、ここではまず自身で目撃した戦時のモスクワの様子を記してみたい。この時期、ロシアを訪問した日本人も少ないであろうから、読者のみなさまに専門や関心の違いを超えて関心をお持ちいただけるのではないかと考えている。



国公立大学が教職員のロシア渡航を禁じているなか、筆者は2023年3月末に定年退職し、この制約を受けずにすむようになった。そこで、同年9月、“自己責任”でモスクワ、そしてサンクト=ペテルブルクに弾丸出張を試みたのを皮切りに、昨年の9月、今年の2月と計3回ロシア(あとの2回はモスクワのみ)を訪ねた。

2023年9月、街中で戦時を感じさせる風景は、わずかにドゥーマ(国会下院)の前で中年男性がひとり、「プーチン支持！」(За Путина!)と大書した大きな旗を掲げていた(ひと目で外国人とわかるわたしをにらんでいた)のと、地下鉄車両に募兵のポスターが貼ってあったくらいであった。テレビのニュースは前線の兵士へのインタビューが多かった。また、「フェイクに抗して」と題した西側報道批判のための、怒声が飛び交う特別枠の番組もあった。ロシアの新100ルーブリ紙幣(写真1)には驚かされた。第2次世界大戦期の戦士らしい人物のある面の右端は朱色に彩色されたロシア地図、色の濃いところはウクライナ領東部ではないか？領土獲得を宣しているのか、“ロ・ウ一体”を

謳っているのか？

昨年9月も、街角には戦争の影はほとんど見当たらなかった。唯一、ところどころのコンクリート製ベンチに「軍務。モスクワで連絡した場合、最初の一年、報酬は520万ルーブリ、契約一時金230万ルーブリ」という破格の好条件で兵を募る広告(写真2。1ルーブリは1.6円くらいだった)が

<写真2. 道路脇ベンチの募兵ポスター(2023年9月)>



あるくらいで、テレビもニュース番組が戦況と兵士のインタビュー、西側の“ロシア包囲網”について報道を繰り返すだけで、アジテーション気味の絶叫などはなく、他の番組は平和なものであっ

<写真1. 新100ルーブリ紙幣>



※ウクライナ領の一部を含むロシア地図の部分拡大



た。店が何軒も閉鎖されているのを目にした1回目のときと違い、街はにぎやかで、物価は上がっていたが、物資は豊富(アメリカ製バドワイザーもたっぷりあった)であった。

2025年2月になると、その前年9月に見た、破格の待遇を約束した募兵ポスターは、明らかな剥がし残しを除いてすべて撤去されていて、「モスクワの冬」という、楽しそうなモスクワ市の観光キャンペーンのポスター(写真3)に替わっていた。また、地下鉄車両には壁一面広告で、極東への移住を誘っていた。連邦極東管区が土地1ヘクター

<写真3. 写真2と同じベンチ(2025年2月)>



ル無料提供とのこと。人々の表情も気のせいかわかる、戦争はもう終わった(勝ったでも、負けたでもなく)かのようにであった。この点顕著なのが、現地通貨の対ドル相場で、10日に1ドル=98ルーブルだったのが、14日には95ルーブルになっていた。戦争終結=制裁緩和・解除を見込んでの変動なのであろう(現在は80ルーブル台前半)。

3回目の出張時、世界の現状を巧みに抉り出していると評判の、エマニュエル・トッドの話題作『西洋の敗北』(大野舞訳、文藝春秋社、2024年)を読んだ。多くの疑問を抱いたが、戦時にモスクワを訪ねてみて、トッドの指摘と重なる印象を持ったのも事実である。

トッドは、「フランス人権宣言」など「人類の多年にわたる自由獲得の努力」(日本国憲法第97条)を度外視して、適度な人口増、核家族化、高等教育の普及などによって形成され、安定した“中流階級”こそ、西洋“民主主義”の基盤であるとして、戦後ソ連・東欧でもそうした階級が形成されてきたために“共産主義”は放棄されたとみる。しかし、ソ連解体後の著しい経済的混乱のなか深刻化した「アノミー」状態から国民の再統合に成功したとして、プーチンを、その激しい異論弾圧には触れないまま、高く評価する。ロシアは決して、「怪物のようなプーチンに支配され、愚かなロシア人であふれている」(同書56ページ)のではなく、彼らのプーチン支持は冷静で自主的な選択の結果であるとする。確かに、筆者もこの3回

の渡航で、ロシア市民の冷静さを実感し、不気味にさえ思えた。

同時に、トッドも言うように、広大な領土に1億5千万弱の人口が散らばるロシアは、もはや“大国”ではない。筆者がこの2月に見た地下鉄の極東移住を誘う広告は、逆に言えば、極東が隣国=中国と経済関係を強め、中国経済圏に絡めとられようとしていることに当局が焦燥を強めた結果ともいえよう。筆者は2013年12月、ある取材でウラジオストクに出向いたが、そのときですら、街には中国人が溢れ、そこそこに中華料理店が誕生していた。モスクワでも、街角のドアの外国語表示はpull, pushから「拉」、「推」に替わり、2回目の滞在中から中国の「中文国際」チャンネルがテレビで普通に見られるようになったが、極東はさらに広く、深く中国経済に蚕食されているのであろう。

そもそも小国であるうえに、経済破綻のなかで人口の大規模流出が止まらず、“破綻国家”(Failed state)になりつつあったウクライナ相手に、このたびの戦争では予想外にてこずることになった。プーチンの大誤算である。ここまではトッドも言うが、筆者の都市部に限られた観察では、破格の好条件を提示しても兵はあつまらず、人心は戦争に倦み、プーチン政権から離れつつあるように感じられた。さらに人心を失わぬよう、プーチンはへたにウクライナ、アメリカ、EUに譲歩することはできない。もちろん、「統一ロシア」(Единая Россия、本来、「たったひとつのロシア」と訳すべき)の動員力はあなどりがたい。“戦勝”を祝う大げさな集会、パレード等もなされるであろうし、そもそも選挙による政権交代など考えられないお国柄である。しかし、筆者のごく限られた範囲での観察でも、“終わりの始まり”が予感できた。

ちなみに、現在の西洋(日本を含む)における民主主義の危機について、トッドは、各国で繰り広げられた新自由主義政策により、民主主義を担った“中流階級”の多くが没落に瀕しているが、かつてのように“左派”が求心力を発揮できず、“右派”の健闘が目立っている原因を西洋の労働者階級が“その他の世界”の労働(忖度すれば、移民や外国人労働者の、か?)に依存する、古代ローマ帝国末期の“プレブス”(平民)のようになり、もはや、“左派”が抱く「人間はみな平等」という根底的な理念を共有できなくなっているからだとして説明している。理路はかなり怪しげなのに、結論は妙に合っている、やっかいな本である。